



Title	日本語学校における一人っ子の中国人留学生増加に伴う問題
Author(s)	範, 玉梅
Citation	阪大日本語研究. 2005, 17, p. 59-90
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8336
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語学校における一人っ子の中国人留学生増加に伴う問題

The Issue of an increase in only children from China in Japanese Language Schools

範 玉梅

Fan Yumei

キーワード：一人っ子 中国人留学生 異文化環境 日本語学校

【要旨】

2003年、日本は留学生10万人時代を迎え、中国は一人っ子が留学生の主役になり、日本語学校での就学生¹⁾は7割以上が中国人となっている。中国で「小皇帝」として育てられ、問題児だとされている「一人っ子」たちの来日によって、日本語教育の現場になにが起きているのか。このようなこれまで研究されていない現象を解明するため、質的研究であるグラウンデッド・セオリー・アプローチを採用して本研究を行った。そして多様なデータの比較から、従来の留学生とまったく違う「新・新人類」²⁾の成長環境が明らかになり、彼らの困難な留学生活の実態を描き出した。自由がほしいが、他者への依存から抜け出せないという「新・新人類」の心理状態には「混迷」が現れている。一人っ子が日本で手にした「逸脱的な自由」を、どのように管理すればいいのかということが留学生自身の問題であると同時に、日本語学校にとっても、今後の重大な課題となってくるのではないかと。

0. はじめに

「…あの時（日本へ来た時）、特に心がいつも虚しく感じる。ずっと皆に甘やかされ、宝物のように扱われてきたから、日本へ来て、パーと地面に落ちた感じで、何を言っても、いくら呼んでも、誰も応えてくれない（中国語では『叫天天不应、叫地地不灵』）。中国にいた時は、いつも父母がいたから、後ろに盾があった。もし私に何かあったら、だめだったら、お父さんはきっと助けてくれる、お母さんもきっと助けてくれるという感じだった。しかし、今は遠すぎるから、特に虚しく感じている。いつもどうしよう、どうしよう、どんなことでも、どうしたらいいかいつも分からなくて、（ほかには）何も考えてないし、どんなことがあってもいつもどうしよう、どうしようというような感じだ。先生は授業が終わるとすぐ帰るし、だれに、なに

を言えばいいのか、どうやって問題を解決できるか全然分からなかった。」(Me)

この数年、日本語学校の教師の間で中国出身の学生が変化しているという認識が広がっている。「皆(学生)国立大学志向が強い」。「国立大学へいけないと、すぐ諦め、専門学校に流され」、「受動的な学習姿勢」で、「学習目的がない」、「生活管理ができない」、と教師たちは考えている。しかし「学生との付き合いをどうすればいいのか」、問題への効果的な対応策はまだ見いだされずにいる。本論文は、中国出身の学生の変化の原因を中国社会の歴史的、文化的背景から探るとともに、日本に留学している学生へのインタビューを通じて、彼らが留学生生活をどのように経験しているのかを明らかにし、問題の解決のための提案を行なう。

1. 研究背景と研究目的

1. 1. 研究背景

1. 1. 1. 日本の留学生の受け入れ

1970年代まで、日本は外国、特にアジアの国々との教育交流が不十分で、留学生受け入れ体制も不完全であった。80年代以降、留学生の受入数の少なさを国際貢献度の低さとして捉えた日本政府は、中曽根政権時代の1983年、「留学生受け入れ10万人計画」を発表し、21世紀初頭の留学生10万人受け入れを目指した。

1983年の時点で留学生は1万人強であった。その後、順調に受入数を伸ばすものの、1990年代に入ると5万人前後で推移するにとどまった。2000年あたりからはその数を急激に伸ばしているが、これは中国からの留学希望者へのビザ発給が緩和されたことが大きい。また、その背景には少子化によって日本人学生数が減少したために、多くの大学が留学生受け入れに積極的な動きを見せたという事情もある。現在、留学生の8割以上は中国を含む日本周辺の地域から来ている。文部省の統計によると、2002年現在の日本語学校における就学生の70%ほどが中国出身であるという。

1. 1. 2. 中国人の日本留学

中国が日清戦争に敗れた翌年の1896年から、魯迅、周恩来、郭沫若など現代史に名が残る多くの文学者や政治家が留学生として日本にやってきた。1910年代まで続いたこの日本留学ブームは、その後の軍国主義侵略によって一時中断されたが、1980年代以後、鄧小平の開放政策を背景に第二次のブームが起こった(段・2003)。一度目のブームにおいて、中国から海外に出た留学生の総数は数万人程度だったのに対し、第二次ブームでは日本への

留学生に限っても、既に二十万人近くに上っている。日本社会との交流の幅と深さも昔と比べ物にならない。

戦前の日本への留学は官費や資産家たちに支えられたケースが多かった。そのため、若者たちは苦しいアルバイトをそれほどせずに済んだ代わりに、日本人と日本社会を客観的・全体的に理解することができないままであった。それに対し、近年の留学は中国の一般国民にまで拡大され、彼らは主にアルバイトで学費と生活費を稼ぐことで、日本人と日本社会に幅広く接するようになった。日中両民族が日常の生活を通じて相手の思考様式・行動パターンを把握するという初めての、そして真の交流が始まったのである。

近年、中国の若者の日本留学に関する研究としては、井上（2001）、葛（1999）、岡ほか（1995, 1996a, 1996b）があげられる。これらの研究によって留学生の異文化適応問題は注目されている。しかし、これらの研究には重要な視点が一つ欠けている。それは、日本に留学する若者を一人っ子である留学生として見ることである。次節では、現代の中国で問題になっている一人っ子の教育について述べる。

1. 1. 3. 問題とされる「一人っ子教育」

中華人民共和国（以下、「中国」）で、いわゆる「一人っ子政策」が人口抑制の基本国策と位置付けられ、本格的に実施されるようになったのは1978年である。すでに約25年が経過した。現在、幼稚園児から高校生まではもちろん、大学生も85%を一人っ子が占めている。同時に、家族の規模も縮小の一途をたどり、核家族化が進行した。特に、都市においては、両親と一人っ子で構成される家庭が急速な勢いで増加している。現在の中国には一人っ子が8千万人以上いる（楊ほか・1997）。

生まれた時から「小皇帝」、「小太陽」として大切に育てられる一人っ子は問題児であるとされてきた。中国の教育界では「一人っ子教育」という言葉が既に専門用語として定着している。これは、今後の中国の教育界は、今までとは異なった子供を対象としているため、それに応じた対策・対処をしなければならないという意識の現れと言えよう。幼児期の一人っ子の研究は、林（1989）及び白佐ほか（1998）など数多くあるが、「聡明、幼い、依存性が強い、挫折に耐えられない、理想が高い、平等意識が強い」という特徴の多くは養育環境の影響であることが示唆されている。初期の一人っ子世代は現在既に青年期に入っている。中国の青年期の一人っ子の問題は中国の人々に注目されているが、その研究成果は、『愛と成長』（祝ほか・2001）のほかにはまだない。

中国の大学入試は、毎年7月に行われる統一試験だけである。問題、採点、制限時間は全国共通で、その成績により進学する大学が決まる。受験生はたった一回の入試にすべてを

かける。入試は、一回きりで浪人はない。また、日本の予備校、塾に相当するものも偏差値もない。専科生（日本の短大）もお金があれば誰でも入れるというのではなく、入試の点数と大学（4年制度）の合格点との差が20点以内の人に限定される。このような状況の中で、一人っ子の大学への進学希望率の高まりは当然予想される。

さらに、ユネスコ（『中日新報』2003.09.01）が2003年に発表した世界の高等教育の状況に関するレポートによると、中国は既に2001年の時点で、大学在校生数に基づくデータで、高等教育の規模が世界最大となっている。それにもかかわらず、2002年の時点で大学への進学率は大学就学適齢人口の14%しかなかった。そのうえ、学校の経営状態や将来の就職難への心配から、1999年以後大学への入学者数拡大はかなり難しくなっている。日本への留学希望者が増加している背景にはこのような事情もある。

1. 2. 研究目的

1. 1. に示した背景のもと、一人っ子留学生の来日が、日本語教育の現場にどのような影響を与えているかについては、日本語教育の課題とするべきであろう。しかし、このような状況になったのは、近年のことであり、青年期の一人っ子留学生の研究やその言語学習に関する研究は管見の限りまだない。そこで本研究では、一人っ子の中国人留学生増加に伴って生ずる問題を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2. 1. 方法の記述と妥当性

本研究は質的研究方法の一つ、グラウンデッド・セオリー³⁾の方法を試みた。Stern(1980)は、特定の研究課題や問題領域についてほとんど知られていないような状況、あるいは新しくエキサイティングな見方が必要とされる状況で、グラウンデッド・セオリーは有効であると述べている。この意味で本研究においてもグラウンデッド・セオリーが有効であるといえるだろう。

2. 2. 対象と場

2. 2. 1. データについて

グラウンデッド・セオリーではデータの多様性が重視されている。データは文献を検討することにより補足され、文献はデータの一部として分析される。ここでは研究者の経験でさえもデータの源になる。

本研究では半構造化インタビューで得たデータ以外に、新聞記事、映画、ホームページから得られた資料をもデータとした。専門文献も利用した。本調査のインタビューは2002年11月から2003年11月中旬にかけて行った。

2. 2. 2. インフォーマントについて

グラウンデッド・セオリーは異なるタイプのインフォーマントからデータを取る方法である。飽和状態、あるいは新しい情報が出なくなるまでデータを取りつづけるのが特徴である。情報提供者の情報は下記の通りである。なお、本研究では、倫理的問題⁴⁾を考慮した上で、情報提供者のプライバシーを保護するため、情報提供者はすべて匿名にし、アルファベットで表す。

表1 日本人教師情報提供者概要表

対象	Ha	Og	Ki	Ou	Ku	Ta	Si	Ab	Ok	Oo
職歴	5年	15年	6年	15年	2年	13年	7年	18年	8年	5年
学校の種類	日	日・専	日・短	日	専	日・大	大	日・専	日・短	日
職別	非常勤	非常勤	非常勤		非常勤	専任	専任	非常勤	非常勤	非常勤
仕事内容	教師	教師担任	教師	経営者	教師担任	教師	教師進学	教師	教師	教師
年齢	20代	50代	30代	40代	20代	30代	30代	50代	30代	20代
性別	女性	女性	女性	女性	女性	女性	男性	女性	女性	女性

属性：日（日本語学校）、専（専門学校）、短（短大）、大（大学）、進学（進学指導）、担任（担任教師）

表2 中国人情報提供者概要表

対象	Mo	Li	So*	Te	Me	Ni	Ox	Sh	Wa	Za	Zh
属性	大学生(就)	就学生	大学院	大学生(就)	就学生	大学院(就)	教師(親)	研究者(親)	主婦(親)	中国人教師	領事
年齢	20代	20代	20代	20代	10代	20代	50代	50代	40代	20代	30代
性別	女性	男性	女性	男性	女性	女性	女性	男性	女性	女性	男性

属性：(就)＝元就学生、親＝一人っ子の親、So,Te,Me,Ni,Mo,Li（一人っ子）

* So は中国の大学院生で日本へ短期留学にきていた。

2. 2. 3. インタビューについて

2. 2. 3. 1. 半構造化インタビュー

保坂ほか（2000）によると、インフォーマントに自由に語ってもらうという形ではあるものの、同時にこちらの設定した諸項目について聞き取るという緩やかな枠組を持ったイ

インタビューを半構造化インタビューとよぶ。この方法によると、インタビューは臨機応変に質問を追加することができるので、工夫によっては相当に詳しく聞き取りを行うことができる。半構造化インタビューは論題全体をカバーするように焦点を当てた質問項目に基づいている。本研究で質問の大枠になったものを表3に記す。

2. 2. 3. 2. インタビューの大枠

表3 インタビューの質問項目表

日本人教師	一人っ子留学生	一人っ子の親たち	研究者	領事
<ul style="list-style-type: none"> ・今の日本語学校の変化 ・教師側と学校側の対応 ・変化を起こす原因 ・一人っ子留学生のこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・来日目的 ・生活について ・学習について ・理想と現実 	<ul style="list-style-type: none"> ・子供への期待 ・子供の育て方 ・心配なこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・現代の学習者 ・留学生問題 ・日本という社会 	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生の変貌 ・両国の政治文化背景との関わり ・これからの留学

2. 2. 3. 3. データ記録：（インタビューデータ）

日本人教師： 約 60分～160分 7本

一人っ子留学生： 約60分 6本

親： 約60分 2本

親と留学生： 約100分 1本

領事： 約60分 1本

日本語学校の中国人教師： 約90分 1本

Og：フィールドノート 一部

2. 3. 独自の技法と手順

2. 3. 1. データ分析方法

2. 1. でも述べたように、本研究はデータ分析方法にグラウンデッド・セオリーのアプローチを援用する。グラウンデッド・セオリーにおけるコード化とは、分析中に概念やテーマが明らかになり命名されるというプロセスである。データはカテゴリーを作る為に変換され、まとめられる。これらのカテゴリーが作られることで理論は発展し、統合される。コード化について Hutchinson (1986) は、レベル1、レベル2、レベル3があるという。

レベル1またはオープンなコード化は、全てのデータをコード化し、コードは直接的にデータに基づいている。あるいは参加者の言葉を使う。このようにすることで研究者の先

入観を持った考えを避けることができる。

レベル2はコードを似たような特徴をもつ概念のグループに要約する。カテゴリー化することで最初のコードよりも抽象的になる傾向がある。

レベル3の構成概念は主要なカテゴリーである。データから生まれ、データに基づいているとはいえ、分析によって系統立てられており、これらの構成概念をつくりながら、分析者はデータを新たに組み立てる。データを新たに組み立てるこのプロセスは、軸足コード化と呼ばれている。レベル2でカテゴリー化された概念はカテゴリーの諸特徴を明らかにする中核カテゴリーに結びつけられる。

グラウンデッド・セオリーにおいて、ほかのすべてのカテゴリーに結びついている主要なカテゴリーを、中核カテゴリーとよんでいる。中核カテゴリーは糸のように研究全体に織り込まれ、それを取り巻く全てのカテゴリーを結びつけることは、選択的コード化とよばれる。中核カテゴリーは、その研究の基本的社会・心理過程である。基本的社会・心理過程は時間の経過に伴って起こるプロセスであり、行動における変化を説明する。これは研究者が問題の本質を発見し、出現した理論要素すべてを統合するということを意味する。

2. 3. 2. 分析手順

分析手順としてはグラウンデッド・セオリーのアプローチの方法に沿い、データを以下のような4つの段階を経て分析した。

- (1) 全てのデータをレベル1でオープンなコード化をした。レベル1のコードは引用の形の「3. 現象分析」の記述で具体的に表されている。
- (2) 全てのデータをレベル2でグループにコード化をした。①「日本人教師」、②「一人っ子留学生」、③「親たち」、④「領事」及び⑤「それ以外のデータ」という5つのカテゴリーでそれぞれ横比較分析を行った。
- (3) 全てのデータをレベル1とレベル2のコード化した上で、レベル3で軸足コード化した。「3. 現象分析」は軸足コード化であり、具体的に「日本語学校における中国人の一人っ子留学生の増加現象」の背景と問題を分析した。

また、井上(2001)⁵⁾の提案を考慮したうえで、下記の右側に書いているように[ブランド志向]、[自由の神話]、[故意の孤独]、[『居』場所の虚無]というカテゴリーを選び、軸足コード化した。結果として下記の左側のカテゴリーが浮かびあがってきた。上記4つのカテゴリーは井上(2001)の提案と似ているところがある。しかし、井上(2001)のカテゴリーと一対一で対応するものではない。

各カテゴリーの下での軸足コード化は具体的に[A原因となる条件-B現象-C文

脈-D 介在する条件-E 行う戦略-F 帰結] (南・1999:98) というプロセスで行った。

- <1> 変動の中国の背景 - ブランド志向
- <2> 危険な贈与 - 自由の神話
- <3> 異文化環境での波動 - 故意の孤独
- <4> 決められたコミュニティ 「居」場所の虚無

(4) 選択コード化 - 中核カテゴリー

中国人の日本留学ブームを背景としての一人っ子留学生の増加に伴う問題の分析を総考察した上で、中核カテゴリー [逸脱的な自由の管理] を引き出した。[逸脱的な自由の管理]のもと、軸足コード化によって出来上がったカテゴリーの関連は、選択コード化というプロセスで説明した。

以下「3. 現象分析」では上記(3)を取り上げ、詳細に記述した。(1)と(2)はデータをそのまま引用したり、カテゴリーを引用する形式で表したり、組み合わせたりすることで、新しい形に記述し直した。「4. まとめ」では(4)を取り上げ、(3)の軸足化したカテゴリーの関連性を考察することで見出した中核カテゴリーを記述し、その妥当性も検討した。

3. 現象分析

ここでは、日本人教師が理解できない中国人留学生の [ブランド志向] から始まり、3. 3. 2. 分析手順(2)の各カテゴリーに沿って一人っ子留学生を生み出した中国の背景、彼らの留学生生活を分析する。以下のデータの引用元は略称で示す。略称は表1と表2を参照されたい。Fa は筆者である。

3. 1. 【変動の中国の背景 - ブランド志向】

3. 1. 1. 中国の伝統-親たちの歴史-社会環境

3. 1. 1. 1. 伝統的な考え：家庭教育の観念

昔から中国に「子を養って教えざるは、父の過ちなり」(『老子』)という言葉がある。家庭教育はもともと中国人が1人の人間や家庭の素養をはかる重要な尺度となってきた。家庭教育の問題も社会問題の一つの焦点として絶えず中国人に注目されてきた。

2002年10月、『中国教育報』に、どのような父母になるべきかという文章が掲載された。

その中で1人の母親は「子供の教育問題が一番心配です」といい、又ある父親は「どんな『長』でもうまくやれるが、『家長』の務めだけはうまくいかない」といった。中国人はいま、家庭教育の問題で、相当困惑し、悩んでいるようである。つまるところ、どのような子供に育てるのが成功といえるのか、どのような教育が優秀な子供を生み出すのか、中国の父母たちは困惑している。

ハルビンの婦女連合会が行った教育の現状に関する調査によると、88.7%の親が子供に大学へ進んでほしいと考えている。大多数の親は子供をしっかりと勉強させ、将来、大学に進学させ、さらに修士、博士にするのが家庭教育が担う第一の責任だ、と答えている。(『人民中国』1998.09.08)

中国人の伝統的な観念では、子供を養育するのは、一家が代々続き、一門が栄えるためである。このような子育ての目的が、中国人の教育のあり方を決定する。そのため、大多数の中国の家庭では、もっとも重要なのは子供が優れた人材に育つかどうかということである。そしていい学校に行き、いい大学に入学することが人材として世に出る第一歩であると考えられる。これは中国人の価値観を反映している。

3. 1. 1. 2. 損失補償意識：親たちの時代

「あの時代は、個人には何の職業の選択権も無いばかりでなく、多くの人が基礎教育を終えることさえできなかった。教育が受けられなかったことは、終生、補うことができない損失となった。(Ox)」現代の一人っ子の親たちはほとんどOxのような、青年時代を文化大革命(1966～1976)の中で過ごした年代である。

だからこそ彼らは、次の世代の子供に対する期待や望みが、ことのほか強い。子供が役立つ人材に成長するのを望むだけでなく、更に多くの親は自分がかつて実現できなかった理想や希望を、子供に叶えてほしいと望んでいる。インタビューした親たちは自分の気持ちをこのように述べている。「あの子が生まれてからずっと心配していた。子供のためにこの数年ずっと努力してきたが、その心配を子供が感じたら圧力になるからずっと隠している(Wa)」。「期待しすぎるかなと思うけど、意識的にも無意識的にもよく勉強しなさい、高学歴をつけなさいという話をよくする(Sh)」。

さらに、中国人の社会学者である鐘(1992)は社会学の視点から、中国人の親たちが子供を溺愛する傾向が強い原因を、「『補償』意識の産物」、「二重の競争原理の産物⁹⁾」、「『誇示的消費』の変形」、この三つの心理要因に繋がっていると論じている。ここから一人っ子が親たち又は家族全体の理想や目標の担い手としてみなされていることが分かる。

3. 1. 1. 3. 若者の環境：自由と成功の神話が流れる社会と家庭の空気

A：充分な自由を与える家庭の空気：親たちの家庭教育方法

一人っ子留学生たちは生まれてから「小皇帝」「小太陽」として育てられてきた。親たちは「私は自分の子供が勉強だけに専念できれば他には何も要求しない (Wa)」、「家庭の中で彼がすることは一つだけ。それは学習だ (Sh)」、「子供がよく勉強さえすれば、他のことはなんでも満足させる (Ox)」等々という考えで一人っ子の親たちは子供に学習以外何もさせない。そして子供がほしいものなどは無理しても買い与える。だから台所に入ったこともない子供がたくさんいるが、「日本へ来る前にはできないことはなかった (Me)」と言う子供は少なくはない。「私は No. 1 (So)」。世界が私を中心に回っている。だから「何でも一番じゃないとだめ (Te)」。このように自分に対する完璧な評価の追求意識が日々の中で育てられている。親たちの努力で世界の美しい面ばかり知らされてきたことはいうまでもなく、経済の急速な発展に伴い、彼らの目の前には美しいものが次々登場する時代なのである。彼らの中には、常に比較になるのが空想の世界にあるものだといえ、自由と美しさは無限だから、無限というものを手に入れることが実際に彼らの目標として設定されているのではないか。

B：自由と成功の神話が流れる中国社会：金字塔とラグビー⁷⁾

ここ数年、中国の経済発展により、留学生を取り巻く状況は前より大きく変わってきた。一人っ子留学生たちの母国での社会環境を考えたら、驚かされることが多い。中国には成功する本や成功する神話が溢れているので、人々は失敗に目を向ける時間もない。人々の集まりで必ず盛り上がる話題は、チャンスと成功と株で儲かったことである。よくある話だが、「ある人物はA会社で成功した後ですぐこの会社を辞め、B会社に入る。そこでもまた成績を上げた。次は業界を変えて、また成功した。しかもこの人物はまだ30歳ぐらいだ」という。「帰国はいつもショックだ。自分が遅れている気がする。友達の生活と比べられないし、話もついていけない。皆もう若いうちになんでも揃えている (Ni)」。「中国と日本は違う。中国は若者の天国、若者がお金を持っている。(若者は)一日も早く成功したい、成功できると思っている。30歳になって、大きな成功ができなかったら、もう歴史の舞台から引退すべきだ。もう人生はおわりだ。(So)」という今の時代の留学生に特有な考え方は、市場経済がもたらす自由や経済発展がもたらすチャンス、社会構造による階級分化の刺激の中で作り上げられたものなのである。「世界は私のもの、成功は夢じゃない、ただ私が大きくなるのを待っているだけだ」。このような意識が彼らの心の中に潜んでいる。ただ本人たちはまだはっきり分かっていないのである。親の避護傘から出たら、彼らを待っている現実がもたらす喜びと悲しみの深さが同じだということも、今の彼らには想像する時間さえないだろうし、恐らく親たちもはっきりわかってはいないだろう。

3. 1. 2. 家庭という背景 — 愛の真理

「1人の父親が、娘の学資を稼ぐために、1人で日本に出稼ぎに行き、八年も家に帰らなかった。しかも娘が米国のある大学に合格した後も、彼は引き続き日本に留まり、働いて学資を稼いだ。〔小留學生の問題〕2003〕多くの親たちは、この父親の犠牲的精神に感動して涙をこぼした。これは、中国の家庭に存在する問題を示している。それは、子供が第一であり、子供に対する親たちの期待が過剰なことである。様々なデータから見ると、数多くの親たちが子供たちに与える未来は、あたかも一本の道しかなく、それは高学歴を追求することだといえる。これは数千年に渡り伝えられてきた「学びて優なればすなわち仕う」という封建思想を体現している。

「ママ、僕、本当に疲れた。(Wa)」と子供はしょっちゅう嘆いているが、「今苦しくとも、将来、すばらしい前途が開けることは価値あることだ、子供が大きくなれば、自然にそれが分かるに違いない(Ox)(Wa)(Sh)」と親たちは考えている。これは愛の真理だと親たちは信じている。しかし先の出稼ぎの話聞いた子供たちの反応は、親たちとは違ったものであった。「この子はかわいそう。生涯あの子は、父親に借りがあると思うからだ(Me)(Li)」というのである。

「愛」を重く感じた子供も、親の期待を受け入れやすい心情にあり、当然期待されることが行動を方向づける動機になり、無意識的に親の期待に応えようとする。そして、家庭の中で学習以外は何もさせない、どのような要求でも満足させる自由な空気及び中国社会に溢れる成功の神話、人々の留学への憧れのもとで、子供たちは必然的に未来に関する計画を現実と離れているところに立てるようになるだろう。

既に『愛と成長』(祝ほか・2001)のなかで検証されているように、第一世代の一人っ子の大学生は非一人っ子の大学生より未来への期待が高いということが明らかになっている。調査の中の理想の職業で第一位は弁護士と裁判官であり、第二位は企業家であり、第三位は科学技術者である。それと同時に一人っ子の大学生にとって自分自身に一番足りないものは何かという項目で80%の人が「挫折に対する抵抗力」と書いている。

3. 1. 3. 微妙な成長期 — 揺れ動く心

Fa: 「Teさんは、今自分自身が子供だと思っている？大人だと思っている？」

Te: 「…わからない。(不知道)」

25、26歳の人からのこのような答え、それは意外であった。しかし、Teの素直な話から「何も不足のない過保護な生活」のなかで彼らの成長期が20代半ばになっても依然延長さ

れていることがわかる。

大人でもなく子供でもない青春期の彼らの心は常に希望と失望の間で揺れ動いている。ここ数年、中国で青少年の自殺や家出がよくマスコミを賑わしている。中には、一回、試験に失敗しただけなのに、あるいは先生や父母から叱られたただけなのに、すぐ命を粗末にする行動に走るというケースもある。なぜ、今の子供たちはこのようにもろいのかという青少年の問題が既に多くの人の関心事になっている。(劉・2003)

この質問に対して見事に答えてくれたのは『青の稲妻』(「ジャ・シャンクー監督 インタビュー」2003)という青春映画だと考える。この物語は、2001年、大きな転換期を迎えた中国の地方都市に生きる2組のカップルを描き、現代の若者の悩みを再現した。主人公たちは、産児制限を受けた世代であり、兄弟姉妹のような身近に分かり合える話し相手を持たない。そのため、彼らは常に自分のポジションをどこに置けばよいか迷っている。19才という大人でもなく、子供でもない曖昧な時間、彼らは、世の中に毒づき、不可能はないといきがっている。しかし、手に入れられるものと、望んだものにはギャップがある。どこかで変わり行く社会に期待しながらも、常に矛盾と大きな壁が立ちはだかる。

「自分の無力感に対する唯一の解決策として、彼らは犯罪を選び、犯罪により、絶望的ともいえる生活を打ち壊そうとする。極端な行動を取ることによって自分たちの価値を見出そうとしているのだ。彼らは沈滞した青春に自分たちの刻印を残したい。強盗により、彼らの凍りついた存在に変化がもたらされる。」と監督のジャは言っている。彼らにとって、暴力はロマンチックの究極の表現なのである。彼らの孤独は「都会の孤独」と異なり、故意により発生した孤独である。

『青の稲妻』に示唆されたように、この世代の若者たちは極端に矛盾しているといえる。独立したいが、依存心から逃れられないという彼らの心は常に自由と孤独の間で激しく揺れ動いているようにみえる。これは、もともと青春期の青少年の特有の症状を示していると同時に、現在、一人っ子教育のもっとも突出した問題の一つだと北京教育学院の関鴻羽教授(「中国の一人っ子の現状」2001)は考えている。更に親たちによる溺愛と、知教育重視・徳教育軽視の教育結果は、子供たちの将来に災いをもたらすということも、関によって指摘されている。このような教育を受けて育った子供は、ひとたび社会に出ると挫折してしまうケースが、前の世代より多い。彼らは、困難を解決する能力が備わっていないうえ、困難を克服する心の準備もないために、極端な方向へ走りやすい。

3. 2. 【危険な贈与(留学)－自由の神話】

3. 2. 1. 留学とは

「彼ら(一人っ子)は留学することが必要だと思う。今の社会、競争がはげしいから、そうじゃないと今の社会でとても生きて行けない。帰国した人たち(中国語では『海還派』)って、国から優遇政策をうけて会社を起こしたり、高い権威を与えられたり、やっぱり違う。だから自由を手に入れるために(皆留学するんだ。)」(Ox)

このような親たちの話から、留学はすでに親たちに「自由への神話」として認識されていることがうかがわれる。留学は中国で「鍍金」とも呼ぶ。確かに中国人にとっては大きな夢で、自由への近道である。今や留学は自由を手に入れる必要な道だと思われる。

近年、中国で流行っている言葉の一つに「知力投資」がある。数十万元あるいは数百万円をかけて子供を海外へ送って勉強させることが「知力投資」としてブームになっている。インターネットで「留学」を検索すると、4千件ぐらいの情報の中で中国版のものが3千件以上を占めている。中国人の留学への熱望がこの時代に高まったのは決して偶然ではない。

転換期にある中国は、社会的価値感がいままさに変化しつつある。職業が違えば経済的地位が異なり、人々の生活水準の格差を広げている。既に3.1.【騒動の中国の背景—ブランド志向】に述べたように親たちは高学歴によって高収入の職業を得ることを子供の教育の目的にするようになっている。

中国の経済発展に伴い、国際化が進み、国際的人材が求められるようになったため、国の奨励政策と一人っ子の父母の高い期待のもとで中国人の留学ブームはどんどん高まってきた。留学はこの二、三年、特に高校生、中学生が50%をしめるようになり、留学生の低年齢化傾向が社会的に注目され、議論されている(「小留学生の問題」2003)。このことから、「快成(人)材、成大(人)材。(早く大きな人材になりたい)(Wa)」という親子の迫切した気持ちがうかがえる。

3. 2. 2. [危険な贈与：親たちの投資]

「私の周りの知っている人たちはほとんど子供のために方々からお金を借りてる、借りなくても一生分の貯金を注ぎ込んで。彼らは本当に無理してるね。」(Sh)

「お父さんは今年、公務員を辞めてビジネスを始めた。私のためですって。将来日本からアメリカへ留学する費用が必要だから、今の仕事ではとても無理だから。親が子供にこんなにお金をかけるなんて、本当に理解できない。私も一所懸命頑張ってるけど、日本での勉強はそれぐらいの価値があるかとちょっと疑問だね。」(Li)

.....

「望子成龍、望女成鳳」は親たちの願望であり、子供の鮮やかな未来のために、親たちはどんな代償でも惜しまないということがこの時代の中国人の父母の共通点であり、既に周(2002)や鐘(1992)や祝ほか(2001)などによって指摘されている。一般的に経済活動においては、どのような投資家でも最小の投資で最大の見返りを求めるものである。しかし、親と子供のデータから見ると、ほとんどの中国人の親たちにとって、子供の明るい未来は彼らの最高の利益であり、投資量の多少などはあまり考えていないらしく、あまり重要だと思われていない。

当代中国の大金持ちにとっては、数百万円という金額はたぶんたいした額ではないが、普通のサラリーマンの家庭にとっては、それは天文学的な数字にちがいない。たとえ外資系企業で働いている高収入の人達にとっても数百万円を稼ぐことはけっして容易なことではない。ところが、近年の若い留学生のブームは裕福な階級に限らず、庶民にも及んでいる。多くの親たちは貯金の全てを注ぎ込んで子供を留学させる。彼らは「出国さえできたら、きっといい人材になる、きっと様々な知識を増やして力をつけ、バラ色の未来を抱ける。(Sh)」と考えているからである。しかし、この[危険な贈与]の非合理性も明らかで、既に多くの教育関係者の心配事となっている。

3. 2. 3. [災害的な現象—集団的な盲目]

「皆よく言うじゃないですか。外国の学習レベルは低いから、この子の今の成績だったら、外国の一流の大学に入れるんじゃないかと考えて、国内の二流大学に行かせるよりは海外に行かせたほうが早く国際文化と接触できるし、ちょっと無理しても価値があるんじゃないか…」(Wa)

「高校二年から、クラスメートが10人ぐらい留学した。カナダ、イギリス、南アフリカへ行った子もいた。はやめに行けば、言語の勉強の一年が節約できるから、私も行きたくなった。けど、父はだめだと言ったので、仕方ないから一所懸命に頑張った。けれど、ある日、父は私の辛そうな姿を見ながら、『お父さんはMoがかわいそうだと思うよ。Moが大変だったら、日本へ行ったらどう。日本の大学は入りやすいから、こんなに苦労なくいい』と突然言い出した。私は非常に盲目だった…留学って新鮮、面白いかも、それだけしか考えなかった。」(Mo)

日本人教師(Ou, Ab)のデータの中に見られた子供の意志を無視して留学させた親たちの話も含め、すべてのデータから、子供が日本へ来る前、ほとんどの留学生やその親たちは簡単に日本のいい大学に入れるという考えを持っていたことがわかった。日本がビザの発給を制限しているため、日本を自分の目でみることができない中国人の数が限られるなかで、

ほとんどの留学生の親たちは日本へ行った経験がなく、中国のマスコミなども長い間留学を美化してきたことが、日本留学に対する理解欠如の原因だと考えられる。日本留学に対して親と子供は盲目なのである。

この現象を新東方校長徐小平は「留学的罌粟花現象」（「留学的集団無目的」2002）と呼ぶ。「この数年間に留学相談に来た人の中で90%の人は留学の目的がはっきりわからない。これは危険な時代だ。留学は確かに魅力的な道だ。しかし、多くの人が留学の目的を忘れてただ留学の感覚を楽しんでいる。」彼は最近『対話録』の中で今の盲目的な出国の現状を「留学的集体無目的」と呼んでいる。

3. 3. 【異文化環境での波動 — 故意の孤独】

ここ数年、日本政府をはじめ、民間団体が奨学金と留学生宿舎の問題に取り組んだ結果、90年代後期になって、日本の留学環境はある程度の改善を得た。中国の経済も発展し、新しい世代の留学生を取り巻く状況は以前より大きく改善された。「…しかし日本の経済不況で、アルバイトを探すことが以前よりさらに難しくなり、ビザや住宅問題も留学生・就学生を困らせる根源であり、学習条件は10年前とほとんど変わっていない。日本の留学環境がよくなったわけではないといえるだろう。」（段・2003：184）

この「変わる」と「変わらぬ」の間で90年代後期から日本にやってきた「新世代」留学生の彼らにとって、日本ででの生活は天国だという思い込みのとりのバラ色だったのだろうか。

3. 3. 1. 「新世代」が体験した真実の日本留学生活

3. 3. 1. 1. 「電話の話」

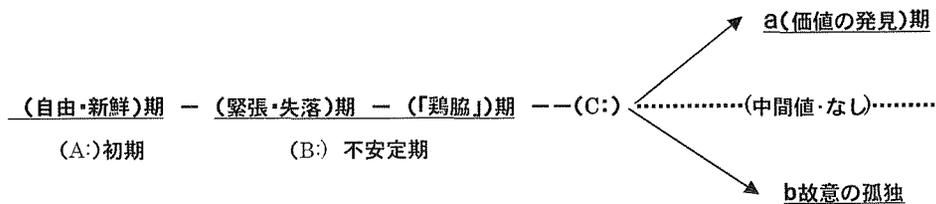
Fa：「パパとママによく手紙などを書きますか？」

Te：「手紙は書かないが、よく電話をする。今はメールをよくするから、電話もしない。日本へ来たばかりの頃はあまり電話もしなかった。来たばかりだから、一切のことが新鮮で、やっと自由に好きなようにできるという解放感もあった。毎日あつという間に時間が過ぎたような気がした。けど、大体半年を過ぎたら、まあ、日本もこんな感じだ。大したことはないし、学習の『圧力』（これは中国語で、日本語ではプレッシャー）、バイトの疲れ、プラス寮の人達がうるさくて勉強もできない、すごく『圧力』を感じた。日本語でストレスというよね。だから、毎日電話をかけた。本当のことがいえないから、日本のいいことだけ言ったけど、月に電話代が3万4万かかった時もあった。大学に入っても思ったのとは全然違うからちょっと失望があったけど、まあ日本で有名な大学だから、人を騙せるに違いないと考えると気持ちが悪くなってきた。でも、今よく考えたら、日本のシステムにはいいところがある。充分な考える空間と時間があるから。

中国はあまりにも緊張すぎて、深くゆっくりものを考える時間がない。だから、今バイトをしながら、学校へ行って、好きな書物を読むことができるようになった。電話もしなくなってきた…」

データに見られるように、ほとんどの「新世代留学生」は、Teと同じように、大学、有名な大学を目指して日本へきた。10年前の留学生と比べ、必死に働かなければならないことはない。しかし、相変わらずアルバイトをしながら、学校に通う生活がごく普通のパターンであるのに間違いはない。

このデータからもう一つうかがえることがある。それは、「新世代」が日本留学に適応する過程である。それは、下記のように、[①うまくいく]と[②うまくいかない]という二つのパターンに分けられ、大体三つの段階を経ていると考えられる。



(注：「鶏脇」とは、ほとんど肉が付いてないので、食べる価値があまりないという鶏の脇の部分；面白くないが、仕方ないという比喻として中国で使われる。)

3. 3. 1. 2. 二つのパターンと三つの段階

(A:) 初期 — 自由・新鮮さ

親から離れて「やや不便」な中で、「新世代」の異国生活が始まる。豊かな自然環境、交通の便利さ、アニメの豊かさ、品物の精巧さに感動しながら、「新世代」は好奇心と興奮の中で新しい生活の楽しみを大いに体験する。「日本人は礼儀正しい、マナーがいい」、「日本語は可愛い」などのように、目に入るものが全て面白く見えるのがこの時期の特徴だといえる。

(B:) 不安定期 — 緊張・失落及び「鶏脇」感

この期間、「新世代」の心理と生活は一番複雑な状態になる。彼らは、日本語の勉強、進学試験、社会への適応、そして学費と生活費を稼ぐなど、いっぺんに三兎も四兎も追わなければならなくなる。このような環境は孤立無援という精神状態を生みやすくなる。常に理想と現実、希望と失望の間を揺れ動く心理状態で、未来に対する希望を失う危険も大きい。相変わらず故郷のことを基準にものを考え、「こっちよりも、あっちのほうがよかった」と考える傾向を、どのように克服するかという問題がある。

(C:) A (初期)とB (不安定期)を経た「新世代」はCの段階に入ると、二つ大きな違う方向に走っていくようになっている。

a 「うまくいく」パターン — 価値の発見

このパターンの留学生は、Teのように、不安定期に入る。彼らはアルバイトと学習が落ち着いている状態で、ある意味で客観的に自分、自国、日本を見ることが出来るようになっている。「日本人の時間観念、思いやりの心、勤勉さと丁寧さ…」など、彼らは「国」と「国」の違いを冷静に見ることが出来るようになる一方、自分の成長の中に親たちの愛、人間としての自立の必要なども、考えられるようになる。下記は2人の留学生の話である。

「日本に来て、分かったのは全て自分でやらなければならない(ということ)。主体的に動かないと誰も教えてくれないから、主体性はとても重要。国で父母と先生が全部やってくれることはよくないと思うよ。一人になったら本当に困るから。」(Me)

「日本で怠け者のような癖を全部直してもらった。バイトとか真面目にやらないとだめだから、つつい細かく考えるようになったし、行動が速くなった。」(Ni)

このような過程を経た留学生に対してSi先生は次のように言う。「初めてきた頃、皆、まあ、普通の中国の学生さんだと思うけど、一年経つと、たくましくはなります。色んな失敗をしてね。日本人とも喧嘩しながら、色んなことを悩んだりしながら、一年日本で暮らすと確かに中国で勉強している人達よりはたくましくはなります。(Si)」

b 「うまくいかない」パターン — 故意の孤独

このパターンの留学生は不安定期を経て、順調に不安定期に入って行くのではなく、いきなり「故意の孤独」に走って行ってしまふ。①と②の間に調整値がかけているということが特徴である。「故意の孤独」に落ち込んだ「新世代」の困難な生活を以下の3.3.2、3.3.3、3.3.4で分析する。

3. 3. 2. 「僕の一日」に映る一人っ子の矛盾

『僕の一日』は一人っ子であるSo,Te,Me,Ni,Za,Li,Moたちのデータから筆者が作り上げたストーリーであり、真の留学生の姿を再現しようと試みたものである。彼らの生活の中には隠されている「新世代」の問題を探ろう。

「僕の一日」

(中国の公園には人がいっぱいいるのに、日本の)人影のない不思議で、きれいな公園を出て、おしゃれな女性が

タバコを吸いながら、コーヒーを飲んでいる喫茶店の前を通って、息苦しい満員電車に乗ることから、僕の一日が始まる。

生活といっても、勉強とバイトしかない毎日だ。「今日あのお客さん、なんて言った？日本語よく分からなかった。」「たいした事じゃないのに、店長はどうしてあんなに怒ったのか、日本人が何に対して怒るのか、あまり理解できない。」が、まあ、バイトはバイト、もう考えたくない。

疲れた僕は、酔って飲み屋から出てきた、疲れているサラリーマンと一緒に電車に乗って、「痴漢注意」の貼り紙を見たり、時には様子が変わる人に目を引き付けられたりする。降りる駅だと気づいて、隣に座っていた一生懸命に化粧した若い女の子と一緒に電車を降りる。折れそうな高い靴を履いている女の子、その青い目、赤い唇、金色のパーマ、胸の谷間が見えるほどのセクシーな服装から、「これから仕事かな」と、いつからか自然に想像しちゃうようになった。そして僕はやっと日本独特の狭い6畳の部屋に帰ってきた。

いつもは遅く、疲れに負けて寝ちゃうけど、今日はまあそんなに疲れてないから、ちょっとテレビでも見ようかなど考える。拾ってきたテレビはあまりきれいには映らないし、日本にはニュースがなさそうだけど、まあ、今日は何か事件があったかなとテレビをつけた。「先日盗まれた ATM は現場から40キロ離れたところで見つかった。中国人の犯罪だと疑われたが、逮捕された犯人は40歳の日本人の男。リストラされ、それに不満を抱いて ATM を盗んだ。次のニュース。大阪の中小企業の倒産…」暗いニュースばかりだと呟きながら、気分転換しようと思って、チャンネルを変えた。でも、変らない。

先日のニュースが頭に浮かんできた。「14歳の中学生、4人、酔っ払って道端に寝ていた40歳のサラリーマンを殴った。その人は死んだ。」自首した中学生の犯行理由は「むかついた」しかなかったって。「21歳の主婦は子供の世話をすることが面倒くさいから、何日も何も食べさせず2歳の子供を死なせた。その子をビニール袋に入れて、ゴミ捨て場に捨てたところを隣人に発見された。」

日本はこんなことが多いなとため息をつきながら、そう、あの腹が立ったことを思い出した。「あなた、旅行ビザだろう。先日広東省から密入国した人のニュースを見た？」あのお客さんの話。あの時、日本語が出来たら絶対反論したのに…。だって今までの人生で誰にも嫌な思いをさせられたことはないのに…。悔しいな。急に気持ちが悪くなってきた。

19チャンネルに夜の世界のお姉さんたちが出てきた。色っぽいな。純粹そうな表情はちょっと偽善だけど、僕は男だから、やっぱり下心があるから、本当に可愛く見える。お金があれば遊びたいな。日本の自由、一回でも体験してみたい。実は僕がよく思うのは、水商売という仕事は日本ではあまり悪くなさそうだということ。簡単にお金がたくさん入ってくるじゃない？テレビでもよくそういうふうに言ってるから。僕が女の子だったら、一か月でいいから働いて80万くらい稼いで、80万あればとにかく勉強に集中できるはず。でも、まあ空想は空想、やはり自分は日本を遠く感じている。

何か元気が出そうなものがないかなと思う。そう、スポーツ。最近日本と中国のバレーボールの対戦があった。小さい頃見た連続ドラマ「排球女将（サインはV）」が懐かしいな。ああいう日本に来たかったのに、なんか違うと

ころに来たような気がする。スポーツと言っても、野球、相撲以外はあまりない。日本の有名な選手がいないスポーツだったらあまり放送されないし、先日の日本対中国のバレーボールも最後まで放送されなかった。たぶん中国が勝ったからだろう。とすると今日も再放送の可能性はないんだ。まあきりめよう。面白くないからテレビを切ったけど、なんか眠れない。

じゃ、ちょっとコーヒーを入れて飲もう。キッチンには何日か前からの皿とか、洗いのものがいっぱい積んである。触りたくないな、明日にしようと思うのはいつものことだ。最近はずっとパンとコーヒーの食事に慣れて、栄養が偏っているような気がするけど、まあ面倒くさいからこれでいいじゃん。もしお母さんがいたら、全部やってくれるだろうと思うと、急にあの頃の幸せを全部思い出した。限りなく贅沢をさせてもらっていても、何を食べても満足できなかったあの頃、僕は幸せというものが分からなかった。「お母さん、お父さんは、このごろはどうですか？お元気ですか？今の時間だったらもう寝ているでしょう。」僕は父と母の誇りだから、息子が日本に留学したことで、きっと周りの人に羨ましがられていると思うと、ちょっと悲しくなってきた。故郷の広い町、人情味溢れる生活、全て僕の記憶の中に生きている、僕を支えてくれている。僕はいつ帰れるか分からないけど、このままだったらだめだ、帰れない。我慢しないと、僕には分かっている。

現実に戻れば、明日はまだすることがいっぱいある。手帳を開ける。家賃を払わなければならないけど、お金がない。午後はバイト。ずっと立っているバイトはちょっと疲れる。辞めたいけど、「外人」いや、「中国人」だから次のバイトを探しても、前のように断られるだろう。やっぱり、辞められない。

去年は公民館のパーティーに行った。僕は、楽しかった、おいしかったと言っただけ。たくさんの人気が集まった。日本人との付き合い方を教えてくれた先輩には感謝するけど、今年は行かない。面白くないから。誘ってくれたあのおばちゃんが中国人だったらすぐ行くけど、日本人だからね、本気かどうか判断できないから、行かない方がいいって思った。もう何か頭がいっぱい、嫌だね。

でも、最近ささやかな楽しみもあるよ。旅行はお金がないから行けないけど、まあ行っても僕が探している壮大さはないから、退屈になるだけかも。この間パチンコで2千円勝った。ゲームセンターでも写真とって、いろんなゲームをやってみた。日本のゲームセンターは本当にすごい。そう、また行きたい。

もう一つ面白かったこと、「飛行機で日本に来たって、あなたは金持ちの子ですね。」って、あのおばちゃんに言われたことがあるから、今日はお客の同じ質問に「僕は泳いできたんだ。」って答えたら、皆笑った。面白いだろう、僕も笑いたかった…。

あ、携帯がなった。こんな夜中は迷惑メールしかないだろうと思ったが、意外にも僕へのメールだ。この間、ちょっとした好奇心で「癒し系、逆援助ほしい」ってメール送ったこと、もうすっかり忘れてた。さびしい女が多いんだな。この人、人妻？学生？OL？分からないけど…。どうする？じゃあ、とりあえず返信しよう。これはストレス（外来のことばだ）の発散かな、と考えていたら、眠たくなってきた。

僕は「明日がある」ことを信じているから。

「僕の一曰」の中に描写されたのは、日々の忙しさと不便さの中で、日本社会に対してショックを受けながら、困難を感じつつ生きている日本語学校時代の一人っ子たちの姿である。この話で筆者が言いたかったのは、日本は彼らの想像どおりではなかったということである。

男女不平等、閉鎖性、曖昧さのような、日本社会に存在している様々な問題に対して彼らの認識不足があったことが考えられる。中国に対する認識不足が日本社会にも同様に存在することで、誤解が起こるのではないかということも考えられる。日本のマスコミ報道が「暗いものばかり」であるのと反対に、「明るいものばかり」の中国マスコミ報道であることから、偏った情報を提供している両国のマスコミが、「壁」をつくったもとだといえるだろう。

したがって、彼らが現実の日本社会に対してショックを受けたのは当然なことである。もともと、若者同士が一番身近な存在になるはずであるのに、皆茶髪、援助交際、むかつきによる殺人などで話題になっている。彼らにとっては日本の若者が理解できない不思議な存在でしかない。「ビルは高いけど、僕と関係ない。旅行は行きたいけど、お金ない。(Te)」というような、日本の主流社会に入れない、狭い範囲での生活は、誤って社会を捉えるようになる危険が大きい。さらに自国のことや自分のことが嘲笑されると、それに対して日本に抵抗する気持ちから敵意を持つようになることもしばしばである。

3. 3. 3. [後悔!!!]

「父から離れ

故国から離れ

そして家族から離れた。

いったい自分は何処に行くのだろうか。

待ち受けている先は孤独と後悔……。

それでも自分を守るためには、そうするしかなかった。

いったい自分は何処へ行くのだろうか？」

一人っ子である Liさんは日本語学校の2年生で、「小詩人」だと言われている。日本での生活について自分の日記を見せてくれた。この詩は彼の日記の第1ページに載っている。「孤独と後悔」、「しかなかった」のところに全部違う形のマークがつけられている。「後悔」のところは「後悔!!!」になっている。

「自分が書いたものではないが、私たちの気持ちが全部描かれているから… (Li)」。留生意識調査によって明らかにされた「新世代」の感覚は、「中国人の留学生は80%の人が後悔している。満足している人は10%。残る10%はどちらともいえない。満足に感じる人はほとんどが公費留学生である。」(「関西新聞」2003.08.27)

3. 3. 4. 問題—故意の孤独

ここまでの分析で、現実の留学生活は「新世代」留学生が思っていたとおりのバラ色ではなく、日々の大変さを体験し、精神も体も疲れている。現実と母国での自由な生活との対比のなかで大きな挫折を味わっているのである。

「…留学は彼らにとっては大きな挑戦だ。日本は礼儀と社会規範にこだわる国だから、この社会に入り込むことができたなら、彼らは色々なことがよりよくできる。逆になかなかこの社会に入れなかったら、問題が深刻になってくる。僕の仕事の中で一番困るのが留学生犯罪のことだが、最近、留学生が自宅で死んだ事件が何件もあり、調査の結果が原因不明、他殺の根拠もないので自殺だと判断するしかない。もっと心配なのは今の子供は、憂鬱になって閉じこもりになりがちなことだ。さらにごく少数の子供は日本の社会で自己コントロールできなくなり不良少年になる。」(Zh)

3. 3. 4. 1. 原因—[出口なし]

様々な「見えない壁」の間で彼らは苦しんでいる。彼らの孤独は出口がないからである。

「最近、耐えられなくて帰国した子が増えてきている(Og)」。そのような状況の中においても「帰りたいけど、帰れない、父母は全てのお金をかけてくれたから、何もせずには帰れない(Ni)」と言い、ほとんどの留学生は後悔をしても帰れないという認識を持っている。「もちろん、帰れない。中国人の思想では逃走することは恥だと思われるから。」これは短期留学生のSoさんの考えである。彼女の素直な話しから、留学に潜んでいる「いくら苦勞しても、我慢すべきだ」という中国人の見方が見えてくる。

「お母さんが怖い。大学進学できなかったので、帰れないし、帰りたくない。(母親の期待に応えられないから、両親にあうことを怖がっているという)」Og先生の不法滞在になった生徒の話から、一人っ子たちの複雑な心境が想像できる。しかし、それを理解してくれる人は少ないようである。

「何かあったら、手紙か電話で言ってね」と父母はよく言うが、「ママはよく電話をくれるが、でも心配をかけたくない。だから『いつも元気ですよ、日本での生活は楽しいですよ』本当の大変さを言えない…(Me)」子供たちの心の憂鬱を素直に両親に言えないこと

がデータからわかった。このようなことは今回の調査でもっとも目立つ共通点である。「話相手もいない、悶々としている(Li)」寄る辺なしの孤独感が彼らの息苦しさを煽っていく。

3. 3. 4. 2. 方法－[ストレス発散]

精神と体の疲労や孤独はストレスの元凶だと思われる。出口はない。それがまた不快感と逃走欲求を煽る。Teのように頻繁に電話をかけるとか、「ゲームセンターでよい気分を取り戻す(Li)」とか、様々なストレス発散の方法で心理的なバランスを取ろうと「新世代」が努力していることは調査においてよくわかった。その中で「一年半たつと限界だと先輩に言われ、去年、私も4回帰国した。そうしないと耐えられなくなるから(Mo)」と言ったような話は「新世代の中に流れている(Me) (Te)」が、日本人教師 (Ha, Og, Ok, Si) のデータによると、結局留学をやめて帰国した一人っ子も、存在し、増える傾向も注目されている。

自分を理解してくれたり、受け入れてくれたりする場所がなければ、異環境への不適応、ストレスや、自分より優れた力を持つものに出会うことなどにより、それまで維持してきた評価の高い自己像が崩れ、大きな挫折感を味わうことになる。そのことに不安を覚え、焦りの気持ちが強くなって来た時に、急激に意欲を喪失していくのが、アパシー(無気力)の始まりとなる。福西(2001)によると、近年、注目されている若者達の引きこもりという現象の要因の一つにこのアパシー・シンドロームと呼ばれるものがある。[専門学校に流され] (国立大学へいけないとすぐあきらめ、専門学校に流され)という現象の説明もここからヒントを得られるだろう。

「私はここでたくさんの友達ができたよ。ここは差別がないから、日本語が下手でも構わない。」これは学校へ行かずに「孤独と自由」のサイトに夢中になっている Li の話である。ここでは、僕の話をよく聞いてくれたり、慰められることがあるという Li の率直な話を聞き、彼らの絶望的なまでの叫びをサイトで見、彼らが心の奥から「居場所」を求めているという苦痛に筆者は驚いた。

3. 3. 4. 3. 問題－[疲労と苦痛]

上述のように、彼らが求めているのは、けっして同情ではなく、他人との連体感である。「居場所を確保していくためには、他者との関わりという第三の要素が欠かせない。しかし、現代の日本においては、この他者との関わりという要素が決定的に欠乏している。」(田中・2003:1)

「ある朝、目が覚めると、体はたいへん疲れていた。この疲れは夢の中の疲れかと一瞬思ったが、それを自分で確認したら、夢じゃないことが分かった。」Me は話しながら腕を見せてくれた。そのどす黒い傷は見ただけでも痛々しい。彼は自分の腕をナイフで切るこ

とで確認したのである。しかも、3箇所もあった。しかし、それに対して、Meは「これで自分がまだ生きていることが分かるから、このような苦痛でも我慢できる」と言った。

ストレスを「自傷」で発散することにびっくりした。しかし「これで人に迷惑をかけないし、迷惑をかけられる人もいないから」という彼の言葉にさらに驚いた。

「日本は物質的な社会だから、よい子でいるのは難しいけど、悪いことを学ぶのは容易だ(Me)」というように、日本社会の自由には誘惑も危険も十分に揃っている。非行、犯罪、殺人などのような様々な危険な選択が彼らを常に誘っている。映画『青の稲妻』の若者のように彼らは「無力感に対する唯一の解決策として、犯罪を選ぶことになるのだろう、犯罪により、彼らは絶望的ともいえる生活を打ち壊そうとする。極端な行動を取ることで自分達の価値を見出そうとしているのだ(ジャ監督)」。

だから、彼らの孤独は昔の留学生の[貧乏な孤独]と異なり、故意により発生した孤独である。[故意の孤独]は「新世代」の新しい問題として注目すべきである。

3. 4. 【決められたコミュニティ―『居』場所の虚無】

日本社会で孤独を感じた「新世代」は、自分の世界である日本語学校という居場所で、どのような気持ちで日々を送っているのか、果たして彼らが求めているものは実現できるのか、ということの本節で明らかにする。

3. 4. 1. 「居場所とは」

居場所に関する「新世代」の認識を明らかにするため、まず、下記のMoのデータを参照されたい。

「想像した学校と全く同じ。こうあるべきだと思っていたそのとおりの姿だ。必要なものは全部揃っている。…先生たちもすごい責任感がある。質問をしに行ったら、いつでもいるし、いつも授業のことを考えているようだ。先生といつでも自由に喋れる感じで、どんなことを聞いても絶対答えてくれる。何を頼んでもすぐ調べてくれる、まるで友達のような感じだ…」(Mo)

このような学校は彼女にとって非常に意味がある場所だといえる。さらに、彼女は自分の感謝の気持ちをこのように述べている。「本当にいい学校に出会い、いい先生に出会ったという感じ。よく勉強しないと、先生にすみませんという感じ…ちょっと高いけど、価値がある」という。

さて、Moの話によると、自分にとって意味ある居場所とは何を意味しているのかというと、思ったとおりの完璧な設備があるだけでなく、学校の先生たちとの社会的な関係性

を持っているということであるという。そのような場所こそ自分が居るべきところだと彼女は考えている。あるいは、自分を理解してくれたり、受け入れてくれたりする場でなければ、自分の「居」場所であるという認識が持てないともいえるだろう。

「居」場所を実感した Mo は話も多いし、楽しい思い出が全て日本語学校と関わっている。先生のことも友達のことでも彼女は詳しく記憶していることにびっくりした。

しかし、残念ながらこのような例は今回の調査では Mo 一人しかいなかった。ほとんどの学生は自分の学校についての失望の声が多かった。

[掛羊頭売狗肉] (羊の看板で犬肉を売る)

彼らは自分が騙されたという気持ちをこの一言でまとめたが、それ以上はあまり言いたくないようであった。以下は先生のことや進学指導のことなどに関する一人っ子たちのデータである。

「学校といっても一般社会の日本語教室のようだ。先生といっても時給制でアルバイトだ。」(Li)

「この学校には進学指導があるといえるかな、小さい貼り紙を見たような気がしたが…」(Te)

「進学学校を自分で探さないと、誰も教えてくれないよ。」(Mo)

「あの全然知らない人(進学指導を担当する教師)、一人(学生)に30分ほど、成績表を見ながら『あなたはこの学校がいい』というような指導が信じられない。彼はいうんだけど、やはり自分は自分の考えですから。」(Ni)

……

「もし本当に興味を持ってくれれば、・・・すべきだと思うが、(Me)」彼らはやってくれるべきだと思ったことをやらしてもらえなかったという。程度差はあるものの、彼らは学校と先生に対する不満、不信の感情を抱いている。「思ったのとは…」違ったため、「ここは本来自分の居るべき学校ではない(Li, Ni, Me, Mo)」と彼らはしばしば口にする。彼らにはいい思い出もあるかもしれないが、不愉快な気持ちが大きすぎるせいなのか、彼らの話になかなか反映されてこない。

3. 4. 2. 偏見と差別の存在

上述のように、日本語学校において、教師との関り方が彼らの認識を左右しているということがわかった。ところで、教師は果たして彼らにどんな影響を与えたのか。ここで、下記のデータを見よう。

[出来ないことがない私の傷]:

Mo : 「日本へ来る前に私はできないことは無かった。国内で中流大学に入ったけど、日本では絶対一流大学に入れると思った。一橋大学しか行かないと思って、先生に相談したら、『この学校は誰も入れないと思う』と言って先生はすぐ帰っちゃった。すごくショックだった。あの先生のことを一生忘れない。」

Fa : 「なぜ先生はそういうふうに考えています?」

Mo : 「中国人の学生は自国で大学に入れないから日本へ来たと言った。」

これは、現在、国立大学で勉強している Mo の話であった。日本語学校時代の彼女を傷つけたのは、先生の偏見であるということがここからわかった。しかし、残念ながら、日本人教師の話しからみると、このような偏見を持っている先生は少なくない。言い方が違うが、一番丁寧なのは次の Si 先生の話である。「…このような状況で日本へ来る人達は言い方が悪いけど、ちょっと中国で困った方々…」。中国のことを良く知っている先生(Si)でもこのような考えを持っている。

さらに、日本語教師へのインタビューから、もう一つの偏見が教師たちの間には存在することがわかる。それは、「お金のために来たんだから、仕方ないわ」というアルバイトに集中する学生に対する教師の認識である。しかし、教師がこのような認識を持っていれば自然に学生の感じるどころとなる。なぜ教師たちは「日本人はこんなふうに私達をみている」と口にした彼らの気持ちが分からないのだろうか。

3. 4. 3. 「大人」意識の付き合い

「最近の学生とどう付き合ったらいいか(Ki)」と数多くの日本語教師は悩んでいるようである。この苦悩のもとはどこにあるのか、まず日本語教師 Ha のデータをみよう。

「私達(日本語教師)が教えてもらったのは学生を『おとな』として付き合うことだが、なんか学生に『先生、冷たい』とよく言われて…」(Ha)

つまり、Ha 先生は留学生と「大人」と「大人」の付き合いをしようと考え、結局うまくいかなかった。そして、このような「なかなかうまくいかない(Ok, Oo, Ki)」データは Ha 先生一人に限らず、インタビューを行ったほとんどの教師の話にも出てきたのである。

さて、なぜ「先生、冷たい」と学生達はよく言うのか。学生のデータもみよう。

「日本へ来る前に、先生は父母だよ、日本へ行ったらよく先生の話聞いてね、なにかあったらすぐ先生に言ってねって、両親はよく言った。だから、私たちは父母の代わりに先生に全ての情熱をかけている。しか

し、先生からの応えがなかったら、その感情はパーと無くなる。急に心まで冷えてくる…」(Me)

上述の心理状態が今の留学生に普通に存在している。彼らは初めて家から離れ、国から離れ、言葉があまりできない状態で、教師以外に何も頼るものがない。データの中では一人の例外もなく「父母、友達、家の暖かさ」を教師に求める声があった。

要するに、留学生と教師の「…すべきなのに、…であるべきなのに」という考えが異なり、その結果両者が満足できない結果になったのであろう。

3. 4. 4. 問題になった「なる」

以下の引用にある「アルバイトばかりするようになった」、「水商売をするようになった」、「何もしない、ただ立っている」男の子、というのは Te と Mo の同級生についての話であり、深い意味がある。

「他の学生は後期になると、ほとんどアルバイトをしに行ってしまった。彼らは来た時は学習のためだけど、半年勉強して、行きたい学校へ行けないと分かったら、お金でもあったら、と考えるようになった。」

(Te)

「来た時とは全く別人になった。髪を染めて、イヤリングをして、タバコも吸うようになった。日本の少女の格好で、日本で生活するということは、よくない影響を受けやすい。大学を途中でやめて夢を探しに来た彼女は何処へ行った。」(Mo)

「彼の学校はうちのむこう(近く)だから、私は毎日授業中、彼が見える。彼は道端で立っている。何もしないでずっと立っている。学校は『掛羊肉売狗肉』(これは中国語で、羊の看板で犬肉を売るという意味)、面白くない、先生はやさしい、出席をつけてくれるから、って、勉強がいやになってきた。」(Mo)

まず注目してほしいのはこの二人とも同級生のことについて、「なる」という動詞を使用していることである。この三つの話によると、今の彼らは昔と変わった。そして良くない方向へ向かっていくようになってしまい、学校は既に彼らにとって無意味な存在になってしまったと考えられる。

つぎに、注目してほしいのは、「アルバイトに集中するようになった」学生のことに関して、「新世代」の見方が教師の偏見(3.4.2.)と違うことである。データからは、「行きたい学校へ行けないと分かってから…」「段々ついていけなくなるから…」、「学校は面白くないから…」という三つの理由が浮かび上がってきた。下記のデータも見よう。

「始めはゼロレベルの子のことを考えながら、授業を進めるけど、だんだん、カリキュラムもきつくな

ってきて、結局できる子のほうにいつてしまう。あの子たちはかわいそうだと思うが、仕方ない。」(Ab)
Abをはじめ、大勢の教師たちは、ゼロレベルの子が混ざっているクラスについて悩んでいる。しかし、上述のようなことがあると、教師は、結局勉強が出来る子供達のお墨付的な役割（勉強ができる学生の手伝い）を果たすことになると同時に、学校は、勉強が出来ない子供たちを排斥することになる。居心地が悪ければ、学校への拒否感情も高まるのは当たり前である。

「捨てられた」と感じた学生たちは新世代の特性も影響して、日本社会の誘惑に負けたり、留学生活に耐えられなくなったり、[故意の孤独]に陥りやすい。

しかし、「帰る道はない」という状況で「ビザのため、お金のため」に行動することは、けっして彼らの本意ではなく、父母が期待することでもないだろう。

3. 4. 5. 問題の中核

「進歩的な教育者がとりうる唯一の道は、被教育者の『いま』『ここ』から出発することであり、彼の現在のありようを受け入れることからしか、ことは始まらないのだ。そうすることによってこそ、彼と共に、その『未熟さ』を批判的に乗り越えることができるのだ。」
(フレイレ・2001:60)

この二、三年、子供の変化に気付いていない教師はいないだろう。日本人教師達へのインタビューによると、最近の日本語学校には生活指導や危機管理などのような動きがでてきている。しかし、それはあくまで少数の学校に限られ、ほとんどの学校は様々な事情から行動できていない。そして、多数の教師たちは依然として「学生がわからない」という。では、問題の中核はどこにあるのかを、一人っ子である留学生自身の認識から探ろう。

[考え方の問題]

Fa: 「Niさんからみれば、一人っ子の留学生の問題はどこにあると思いますか。」

Ni: 「考え方の問題だと思う。私の従兄弟も一人っ子で、去年日本へ来た。彼の理想もとても高い。色々なことに挑戦したいのだけど、何を、どのようにしたらいいか全然分からなかった。日本語学校時代の私と全く同じだった。だから、そういう気持ちがすごく分かる。現実には思っていたのと全然違うでしょう。様々な現状を彼にちゃんと説明してみたら、ちゃんと分かってくれて落ち着いてきた。やはり考え方の問題だと思う。考え方の問題を解決したら、なんとかなるけど、日本語学校だったら、相談する人がいない、『業務』(中国語)じゃないから、指導する人もいない…」

留学に挫折した彼女は自分の経験から、自分も含め、「新世代」が直面する問題及びその

問題を解決する方法を提供している。それは、様々な自由を管理するには、[考え方の問題]をまず解決しなければならないということである。現実から離れたところから現実に戻るまで、この時期に、手伝ってくれる人が一人でもいれば、ほとんどの留学生にとって、社会に対し、自分自身に対し、正しい認識を持つことは難しいことではないと考えられる。

しかし、「業務がない（仕事内容に入っていない）」という彼女の言葉から、日本語学校が単に日本語を教えるだけでなく、心のよりどころとして期待されていることが明らかになってきた。

4. まとめ

本研究では、留学生を「一人っ子」という視点から取り上げた。その結果、「一人っ子の中国人留学生」の問題は一人っ子であることそれ自体よりも、より広いところに問題があり、一人っ子であることに様々な原因が加わって問題を引き起こしていることが明らかになった。

「新・新人類」の特徴はそれぞれ個人差があるが、共通点をあげると以下のようにまとめられる。「幼い、聡明、依存性が強い、挫折に耐えられない、理想が高い、平等意識が強い」という特徴は養育環境の影響によるものであり、様々な研究でも言及されている。また「新・新人類」を困んでいる時代環境は非常に特殊なので、今までの中国人留学生の研究と区別されなければならない。

「一人っ子」は中国の大きな転換期に生まれ育ち、一人っ子という言葉自身も中国の歴史において類のない時代背景を強く反映しているともいえる。彼らの生育環境及び留学生活の中で出てきた様々な問題はこれまでの留学生とは大きく異なっているのである。したがって、彼らが大量に日本に来ることによって第三次の中国人の日本留学ブームが形成されていると考えることもできる。

「新・新人類」は自由や無限に憧れる一方、依存心から抜けられないという特徴を持っている。この矛盾が、日本に留学することにより、更に複雑な形で露呈している。Me(0.はじめにのデータを参照されたい)のように、ほとんどの「一人っ子留学生」は中国では全てのことを親たちが「やってくれる」から、学習以外のことを考える必要もなかった。しかし、国を離れ、学習、生活、アルバイトを全部やらなければいけなくなり、このような「自由を管理する」ためには、どうすればいいのかということに悩んでいる学生が多いのである。

今回の分析から、どのように「自由を管理」するかによって、学生がうまくやっていけ

るかどうか、学校がうまくやれているかどうかが決まると言えそうである。しかし、「自由」というのは「新・新人類」にとっては、普通ではない「逸脱的な」性質を持っている。親達にコントロールされた自由が留学によっていきなり自分のところに戻ってきた時に、「どうしよう、どうしよう」という準備不足の心理状態で問題に直面し、パニック状態に陥りやすい。本研究では、この状態を解決できるかどうか彼らの心理的安定状態と直接かかっていると明らかにした。解決できないと、[故意の孤独]に走ってしまう。彼らは「理想が高いが挫折に弱い」、自由と孤独の間の「中間値が欠けている」からである。これこそ今まで研究されてきた「留学生」と最も区別される一人っ子の特徴だと考えられる。ここで強調したいのは一人っ子の「自由の管理」が教師側にも学校側にも問題として認識されなければならないことである。このような「新・新人類」の「逸脱的な自由の管理」には、「居」場所作りの問題が関わっている。

「居」場所とは、個人が安心して自己を認められる空間であり、また他者との関わりの中でそのつながりが保障される場である。「中国人の若者も日本の若者や韓国の若者と同じようになってきた」という数多くの先生たちの感慨などからみて、日本の若者も同様の問題を抱えていると言える。若者の問題を解決するための「居」場所作りを考えて行くことは「今」「ここ」に生きている私達に共通の問題であるからこそ、真摯に考えなければならないことなのである。

ところが、前述(3.4)したように数多くの留学生が「居」場所を感じていないという現状から、一人っ子の留学生の増加がもたらす危機が深刻になってくることが予想される。そして日本語学校と日本語教師は新しい革命に直面しているということも示唆されている。受動的姿勢、能動的姿勢のどちらを採るかによって、学校としての日本語学校、教師としての日本語教師の生存の運命は決められるだろう。留学生の問題は大人の問題であり、日本の若者の問題でもあり、更に日本社会と中国社会の問題を反映したものである。この問題は社会の阻害力であると考えられるが、しかしこの問題が解決されれば、それは社会の発展の推進力にもなりうるという表裏一体の関係なのである。本研究はこの問題の解決の一助となることを願う。

註：

- 1) 就学生：日本では1990年から「入国管理法」の改正によって日本語学校で学習する外国人の滞在資格の名称を「就学生」。筆者はこのような差別的意味合いを持つ用語を廃止し、就学生を留学生と同様に扱うべきであると考え、本論文では、「就学生」という用語を引用文献と誤解

されやすいところにだけ使っている。

- 2) 「新・新人類」「新世代」などは「一人っ子」が従来の人達とは違うということを強調する言葉として、中国で一般的に使われているので、本研究では「一人っ子」も「新・新人類」も「新世代」も同じ意味で使っている。
- 3) グラウンデッド・セオリーは1960年代から健康専門職者たちが用いている代表的な質的研究の1つである。起源は社会学にあるが、どんな研究分野においても活用することができ、心理学、健康あるいはビジネスの研究でも使用されている。グラウンデッド・セオリーの理論的枠組は、シンボリック相互作用論の洞察から導かれており、人間の行動を探求する人々と社会的役割の間の相互作用のプロセスに焦点をあてている。この研究方法の主な特徴の1つは、データから理論を生成することであるが、現在ある理論がこの方法によって修正されることもあれば拡大することもある。

Wysmans(1990:12)によると、この研究方法でいうセオリーとは、以下のことを意味する。「2つまたは3つ以上の概念の間の関係を明らかにすること、そして何が起っているのかを説明するために、調査している現象について系統的な観点を提示すること」

- 4) 倫理的問題は、すべての研究方法において考慮しなければならない。本研究では参加した人々に面接を求める際は、依頼書を拒否をしたり、途中で参加を取り消したりする権利があること、守秘性を保証することを明確に述べているし、その書式のなかに研究の目的や概略を述べ、情報提供者がどのように関わることになるのか及び研究方法と必要時間を明らかにしている。調査対象は先生や先輩に紹介してもらい、書面の依頼を経て、相手の都合に合わせてインタビューをした。
- 5) 井上(2001)は「留学生をとらえる場合、その文化的異質性だけでなく、多角的な角度から理解することが大切である」とし、さらに、8つのとらえ方を提案している。それは学習主体としての留学生、発達主体としての留学生、青年としての留学生、文化的存在としての留学生、人生移行期としての留学生、大学・地域というコミュニティの一員としての留学生、社会階層の一員としての留学生、対人関係としての留学生である。
- 6) 二重の競争原理：鐘(1992)によると、多くの中国人の考えでは、自分と自分の子供は表面的には二つの世代であり独自性を持つが、本質的には、自分の子を自分の分身又は自分の生命の延長とみなしている。今日の中国大衆心理では、社会的評価が低い職業の人、仕事上の業績がない人でも、もしその人の家族・親族、特に子供に「成功者」がいれば、人々から高い評価される。つまり、彼ら親父世代同士の間競争が存在するだけでなく、各自の子供をも巻き込んだ競争が存在する。
- 7) 金字塔とラブビー：Zhのデータで出てきたカテゴリーである。金字塔は中国社会の喩えて、上の人が少ない、下の人が一番多いということを意味している。ラブビーは日本社会の喩えて、上と下の人が少ない、真ん中の一般人が一番多いということを意味している。

参考文献・引用文献

- 「いかに子どもを育てるか」(2003)『人民中国』2003.09.08
井上孝代(2001)『中国生の異文化間心理学：文化受容と援助の視点から』玉川大学出版社

- 岡益己・深田博己・周玉慧 (1995) 「中国人私費留学生のソーシャル・サポート」『岡山大学経済学会雑誌』2(3) pp.493-523
- 岡益己・深田博己・周玉慧 (1996a) 「中国人私費留学生の留学目的及び適応」『岡山大学経済学会雑誌』2(4) pp.25-49
- 岡益己・深田博己・周玉慧 (1996b) 「中国人私費留学生の日本社会への適応とソーシャル・サポートの関係」『岡山大学経済学会雑誌』28(1) pp.1-22
- 葛文綺 (1999) 「留学生の異文化適応に関する研究：来日目的、対日イメージと適応度との関連を中心に」『名古屋大学教育学部紀要』46 pp.287-297
- 鐘家新 (1992) 「中国の都市における一人っ子を溺愛している親たち－『一人っ子政策』を背景として－」『母子研究』13号, pp.36-37
- 黄広章 (2001) 「少年留学の是と非」人民網 <http://www.peopledaily.co.jp> (アクセス日：2001.06.17)
- 白佐俊憲・呉小娟 (1998) 「中国での一人っ子を巡る諸問題」『北海道女子大学短期大学部研究紀要』34号 pp.35-56
- Stern P.N.(1985) Using grounded theory in nursing research. In *Qualitative Research Methods in Nursing*(de.M.Leininger),pp.149-160, W.B.Saunders, Philadelphia.
- 「ジャ・ジャンクー監督 インタビュー」(2003) <http://theater.nifty.com> (アクセス日：2003.06.03)
- 周枳成 (2002) 『少年留学三思而行』広東教育出版社
- 祝蓓里ほか (2001) 『愛と成長－第一代独生子女大学生心録』華東師範大学出版社
- 「小留学生の問題」(2003) 人民網日本語版 <http://www.japan.people.com.cn> (アクセス日：2003.07.29)
- 田中治彦編著 (2001) 『子供・若者の居場所の構想』学陽書房 p.1
- 田中孝彦 (2003) 『生き方を問う子供たち』岩波書店
- 「大学進学率が14%に2002年度」(2002) 人民網日本語版 <http://www.japan.people.com.cn> (アクセス日：2002.10.06)
- 段躍中 (2003) 『現代中国人の日本留学』明石書店 p.184
- 「中国人の留学生に関する意識調査」(2003) 『関西新聞』2003.08.07
- 「中国の高等教育は世界最大規模」(2003) 『中日新報』2003.09.01
- 「中国の一人っ子の現状」(2001) 中国社会科学院 <http://www.chinapop.gov.cn> (アクセス日：2003.10.09)
- 「どのような父母になるべきか」(2002) 『中国教育報』2002年10月12日
- 南裕子 (監訳) (1999) 『質的研究の基礎－グラウンデッド・セオリーの技法と手順』医学書院
- 野口美和子 (監訳) (2000) 『ナースのための質的研究入門－研究方法から論文作成まで』医学書院
- 福西勇夫 (2001) 『こころのファイル－現代社会の心の歪み』南山堂
- パウロ・フレイレ (2001) 里見実訳 『希望の教育学』太朗次郎社 p.60
- 文部科学省ホームページ <http://www.mext.go.jp>
- 保坂亨ら (2000) 『心理学マニュアル面接法』北大路書房

Hutchinson(1986)Grounded theory:the method.In Nursing Research:A Qualitative Perspective(edsP.L.Munhall&C.oiler),pp.111-130. Appleton-Century Crofts,Norwalk,Connecticut

楊魁孚・陳劍 (1997)『中国人口問題論稿——人口与計画生育幹部読本』中国人口出版社

Wiener C.L.&Wysmans W.M.(1990)Grounded Theory in Medical Research.Swets and Zeitlinger,Amsterdam

劉西 (2003)「8000万一人っ子の素質問題」中安網 <http://tech.anhuinews.com> (アクセス日: 2003.09.30)

「留学的集団無目的」(2002)中安網 <http://tech.anhuinews.com> (アクセス日: 2003.08.02)

林曉光 (1989)「中国の一人っ子家庭の課題」『児童心理』43巻12号 pp.142-145

(博士後期課程学生)

(2004年9月3日受付)

(2004年10月14日修正版受付)

(2004年11月11日再修正版受付)

(2004年11月29日掲載決定)